

受	2	コ	シ	こ
賞	0	ン	ョ	と
作		ク	ー	ば
品	2	ー	ト	ら
集	5	ル	シ	ん
			ョ	ど
			ー	
			ト	

目次

ごあいさつ	町田市長	稲垣 康治	4
ごあいさつ	審査員長	田丸 雅智	6

受賞作品

森の芸術家	小林 花穂	8
飛んで火にいる	小林 宗太	10
猫	福嶋 暁太郎	13
宇宙にあるルーレット	高木 結菜	18
石の恩返し	石塚 灯真	21
畑ピアノ	村山 愛以	23
中休みに出てくる、ふしぎな生き物	廣瀬 かなな	25
おいしいことばレストラン	仲井 美祐	28

町田市長 稲垣 康治

町田市民文学館ことばらんどの開館十五周年を機に誕生した「ことばらんどショートショートコンクール」は、今年で五回目を迎えました。この節目に、市内の小・中・高校生から八四七もの作品が寄せられたことを、心から嬉しく思います。

ショートショートは限られた原稿用紙の中に独自のアイデアと、印象的な結末を凝縮させる文学形式です。子どもたちが自らの想像力を羽ばたかせ、熱心に物語を紡ぎ出す本コンクールは、次世代の感性を育む機会として定着いたしました。

今回の入賞作品は、近未来の発明を描く「飛んで火にいる」や人間の利己的な本質に迫る「宇宙にあるルーレット」、自然の美しさを再認識させられる「森の芸術家」や「畑ピアノ」、星や宇宙が登場する「中休みに出てくる、ふしぎな生き物」と「宇宙人レモネード」、心の機微を料理で表現した「おいしいことばレストラン」、いずれも独創的な作品でした。町田が登場する作品も三作品あり、特殊能力を手に入れられる不思議な猫カフェを舞台にした「猫」、マイナースポーツの「ユニカール」を題材にした「石の恩返

し、「作文犬」では、ショートショートコンクールの作品を書く時の苦悩と願望が書かれています。

これらは、日頃から皆さんが興味を持っているであろうことを題材にしたものだと思います。今後も創作を通して想像の世界で豊かな心を育んでほしいと思います。

結びに、本コンクールの運営にご協力をいただきました東京町田・中ロータリークラブの皆様、審査員の皆様、そして子どもたちを温かく支えてくださった学校の先生や保護者の皆様に厚く御礼申し上げます。

（あいさつ）

審査員長 田丸 雅智

今回も八四七作ものたくさんのご応募を、本当にありがとうございました。絵本的なお話からSF的なお話まで、作風がまったく違う多様な作品たちのおかげで、最終審査会もとても盛り上がりました。受賞者のみなさん、おめでとうございます！

アイデアが大切になるショートショートでは、そのアイデアがどう発揮されるかでいろいろな作風が生まれます。たとえば、アイデアが「擬人化する」という方向で発揮されれば絵本的なものになっていたり、「未来」という方向で発揮されればSF的なものになっていたりという感じですね。この幅の広さも、ショートショートの魅力のひとつです。受賞作を読んで「こういうのもありなのか！」と楽しんでいただければうれしいですし、「自分も書いてみよう！」と思ったなら、ぜひ新しい作風にも挑戦してみてくださいね。

ショートショートの創作は楽しいだけでなく、文章力や発想力、論理的思考力など、生きていく上でとても役立つ力の育成にもつながります。このコンクールをきっかけに、引き続きショートショートの創作に親しんでいただければうれしいです。

受
賞
作
品

森の芸術家

小林 花穂

ぼくは、クモ。でもただのクモじゃないよ。ぼくは、げいじゅつ家のクモ。森の木の枝や葉に糸を張ってクモの巣アートを作っている。ぼくは巣にかかった虫たちは食べない。木の実や、じゅえきの方が好きなんだ。

だからぼくの作品を虫たちにも見てもらいたいと思っている。

今日はどんな作品を作ろうかなあ。糸を枝から葉へ、葉から枝へ、ていねいに張ってきれいなものを作る。うん、いい感じだ。つかれたから、少し休けいしよう。ぼくはひとねむりした。

目をさますと、なんと、ちようちよが巣にかかっていた。ちようはぼくを見ておどろきあわててにげようと羽をばたつかせた。一度巣にかかってしまうとなかなかにげられない。

「大丈夫だよ。食べたりしないから。」

ぼくは、巣の糸を切りそうつと巣からちようをにがしてあげた。ちようは羽を大きく動かした。その羽は今までに見たこともないくらい美しかった。ちようは、ぼくのまわ

りをダンスするように飛びまわりどこかへ飛んで行った。ぼくはあんなきれいな羽のよ
うな作品を作りたいと思った。

次の日からあのちょうのことを思いだしながら作品作りにむちゆうになった。何度も
しっぱいをくりかえしや々と完成した。でも何か足りないような・・・。

その時、通り雨がポツンポツンとふった。くもの巣にしがついた。雨がやんだと
思ったら、次はきれいな花びらがフワフワふってきた。ぼくは空の方を見あげた。

この前のちょうが仲間をつれて花びらをはこんできてくれた。巣にしがくと花びらが
つきキラキラと光る。ぼくの作品は、ついに完成した。いつか町の教会で見たステンド
グラスみたいだった。

それからというもののぼくの作品は森の中で有名になり、たくさんの虫や動物たちが見
に来てくれるようになった。

飛んで火にいる

小林 宗太

秋晴れの青空の下を無数の紙飛行機が飛んでいる。

地上での配達業が進化し紙飛行機の特性をコピーして造られた紙飛行機型配達ロボットが郵便配達で空を飛んでいるのだ。

見た目も神秘的で美しい。

成功だな、と開発者の博士は満足気に空を見上げた。

しかし喜びも束の間、風の力を利用していることもあつてか、冬になり北風が強くなると、ロボットは空中でのコントロールが効かなくなり配達ができず、かといって風が弱いと紙飛行機の出ず時間がかかってしまうということが判明してきた。

「やはり紙飛行機の特性では弱かったか。他に何か良い案はないだろうか」博士は研究室に籠るようになった。

そうしていくうちに季節は移り変わり、つぼみが花開くと、たくさんの虫たちが活発に活動し始めた。

「そうか、虫が良いぞ！ 力のある虫や飛ぶ虫、暑さや寒さに強い虫もいる。あらゆる

虫の特性を合わせればどんな時でも配達できる良い配達ロボットができるかもしれないぞ！　そもそも虫は働き者だからな。」

博士はすぐさま研究に没頭した。

そうしてついに虫型配達ロボットが完成した。

雨の日も風が強い日も、それぞれコピーされた特性を活かした虫型配達ロボットは大活躍だった。

また、空を飛んでいる姿はなかなか愛らしく幻想的で、街ゆく人々の評判も良く、博士もこれなら大丈夫と安心した。

暑い夏がやって来た。

虫型配達ロボットは今日も一日中せっせと働く。

そんなある日のことだった。

「博士、大変です！　ロボットたちの行き先がおかしいんです、いつせいに同じ方向へ向かい制御できなくなっています！」

博士は慌てて確認した。

「どういうことだ、今あっちの方向は花火大会の真っ最中だぞ！」
少し考え博士は気づいた。

なるほど、夏の虫の特性をコピーしすぎてしまったようだ。
真つすぐ飛んでゆく。

燃えるように光を放つ花火へ。

夏の虫たちは。

猫

福嶋 昶太郎

「ひかる光、いい加減起きなさい！ 今日で夏休み終わりよ！」

「はい。」

僕は、朝起きるのが苦手だ。

「お、やっと起きてきたわね。今日の朝ご飯は光の好きな焼き鮭よ！」

「いただきます。」

しかし眠い。二度寝したい。でも、今日はその気持ちを抑えて、最近町田駅近くの商店街にできたという、猫カフェに行こうと思う。

他の猫カフェとはちよつと違うらしい。

「ごちそうさま。」

さてと、準備準備つと。財布持った、ケータイ持った、よし。

「ちよつと出かけてきまーす。」

「どこ行くの？ 光。」

「し、市立図書館に行こうかなって。」

「もう高校生なんだから大丈夫だと思うけど、気をつけてね。」

「はい、いつてきまーす。」

猫カフェまで歩いて35分か。それなら歩こう。他の猫カフェとは何が違うんだろう。猫の数が異常に多かったりするのかな。

着いた、ここか。少し狭く、薄暗い路地を通り抜けた先に、明るく店の名前が書いてあった。【猫カフェねこかぜ】面白そうな名前だな。

「いらっしやいませ！」

「あー、他の猫カフェとは違うことがあるって聞いたんですけど。」

「はい、ございますよ、こちらの部屋です。」

え、何だこれは、部屋にはグレーに白のシマがある太った猫が1匹いる。1匹だけ？あ、なんか説明の紙がある。なにになに、

【この猫は、特殊能力猫です。背中にある八本の長い毛のうち、1本だけを優しく抜き取ってください。8分の1の確率で特殊能力を手に入れます。残りの7本は、「毎回キレイに割り箸を割れる」、「3ミリ浮かぶことができる」などのハズレ能力です。料金は一回5000円です。】

なるほど、これがうわさの他の猫カフェと違うことか。うーん。高いな。でも、たっ

た5000円で特殊能力を手に入れられるかもしれないんだよな。うーん。どうしよう。

やっぱりやろう！ 8分の1でしょ。

「ど・れ・に・し・よ・う・か・な・て・ん・の・か・み・さ・ま・の・い・う・と・お・り。これにしよう！」

ぶちっ！ なんだこれ、まぶしー。その時僕は謎の光に包まれた。何が起きたんだ。ん、なんか頭の中に直接言葉が流れ込んでくる。

「おめでとうございます！ あなたは「動物の言葉がわかる」特殊能力を手に入れました！」動物の言葉がわかる特殊能力だと！ すごい！ 早速使ってみよう！

まずは、その太った猫に「君、すごいね」と言ってみた。すると「へでしよ」と返ってきた。わ、本当に使えた！ これはすごいぞ！ 違うところでも試してみよう。

僕は、利用料金の5000円を払って店を出た。近くに動物がいっぱいいる場所：あつそうだ！ まず手始めに、近くにある町田リス園に行ってみよう！ 僕がリス園に行く途中では、カラスがゴミからあさった食べ物の量を自慢し合っていたり、散歩している犬が他の犬と口喧嘩しているのが聞こえた。ワクワクしてきました！ 僕はリス園へと急いだ。

さてさて、リスたちはどんなことを話しているのかなー《ワイワイわいわい》ん？ リスたちがあっちの方に集まっていったぞ。その中心には他のリスより一回り大きなリスがいる。

《諸君！ 我々リスたちは人間に毎日ヒマワリの種だけを食わされたり、勝手に触られたりと不満を持っている。》

《そうだそうだ！》

《もう我々は我慢ならない！》

《そうだそうだ！》

《だから我々は人間を懲らしめたい！ そこで、案を出してくれる奴はいるか！》

《この飼育員を襲って脱出しよう！》

《いや、この人は親切にしてくれた、だからここはやめよう》

《なら、市役所を乗っ取るのはどうだ！》

《それは良いではないか！》

《では決行は明日の7時30分としよう！ みんな、来た人のかばんに紛れ込んで、ここを脱出し、市役所を乗っ取るぞ！》

《おー》

やばい、大変だ。早くみんなに知らせないと。

僕はそこで目が覚めた。夢か、よかったー。

リスが町田を乗っ取るだなんて、ありえないよ。まだ8時だな。もう一眠りしようかな。

「光、いい加減起きなさい！ 今日で夏休み終わりよ！」

宇宙にあるルーレット

高木 結菜

それは良くも悪くも地球に影響が出るルーレットのこと。その名前の通り、宇宙にある。地球からは毎日一人が地球にあるルーレットで選ばれて、その人が宇宙服をつけてまわしに行く。このルーレットは、一日一回しかまわすことはできない。このルーレットのよいところは、地球に良い影響を与えてくれることだ。例えば、きれいな水が飲めない子供たちにきれいな水一生分を配ったり、戦争をしている国があれば戦争を終わらせてくれたり。いいこと尽くしのルーレットだが、悪いことも多い。地震や火事などの災害が二つ同時に起こったり、全世界で一日中電気が使えなくなったり、さらには、まだ引いたものはないが、隕石が落ちてくることもある。

このルーレットが近年、社会問題になっている。なぜならこのルーレットで悪いことを引いてしまった人たちがSNSなどでせめられて、その人が病んでしまうからだ。あるとき、

「ルーレットを壊してしまえばいいのでは？」

という意見がでてきた。最初は反対の意見が多かったが、次から次へと賛成する人が

でてきて、意見がでてきた数週間後には、賛成派が反対派よりも多くなっていた。そして、国連でも議論された。反対派はもう少数になっていて、ほとんどの国がルーレットをこわすことに賛成した。そして、正式にルーレットがこわされることが決定した。反対派は、最後の抵抗として、デモをおこなった。だが、賛成派の軍によって、反対派は一掃された。そして、地球にあるルーレットで決められた女性が宇宙にあるルーレットをこわしに向かった。そしてついに、二〇XX年、七月五日、ルーレットがこわされた。ルーレットはこなごなになって、宇宙の彼方へ飛んでいった。ルーレットをこわしたことで、何か起こるのではないかと人類はおそれていたが、特に何も起こらなかった。人類は安堵した。地上にあったルーレットも同時期にこわされた。

それから数ヶ月後のある日、突然戦争が始まった。でも、彼らに危機感を感じられなかった。なぜなら、戦争はすぐ終わると思っていたからだ。長い戦争を経験していない彼らは戦争はすぐ終わると信じていたのだ。しかし、さらに数ヶ月後、戦争はまだ続いている。人類は今まで経験したことない長い戦争に混乱した。そしてあるとき、一人の男性がこういった。

「今まで戦争が短かったのは、ルーレットのおかげだったのでは？」

この意見を聞いた人類は共感しSNSでこわした女性を批判した。自分たちをたなに

あげて。結局、その女性は病んでしまった。

人類は、ルーレットをこわしたことを後悔し、こわした人をせめたてた。何度か、ルーレットをつくれなかとと言う意見が出たが、なぜかつくろうとしてもつけれない。つくろうとした当日に、材料が盗まれていたり、つくる予定の工場が急に倒産したりした。人類は、ルーレットは神の化身だったとか、神の化身をこわしたからばちがあたるなどSNSでさわぎまくった。

実際、ルーレットは神の化身などではなく、宇宙に自然生成されるものだが、一度こわすと二度とつくれなくなってしまう。つまり、人類の自業自得である。確かに、災害などの被害は大きくなるが、戦争を終わらせることはそれよりも規模の大きい、すごいことだったのだ。それに人類は気づかなかった。いや、気づくのがおそすぎた。まるで戦争が早く終わることが当たり前ということになっていたから気づくのがおそくなってしまうのだ。

この世界では、まだ戦争が続いている。目の前にある大切なものに気づかず、自らこわしてしまった故に。

石の恩返し

石塚 灯真

俺はユニカールが好きだ。(ユニカールとは、特殊なカーペットでストーンを投げる、町田市でやっているスポーツ) いろんな戦術があつておもしろい。

ある灼熱の日光が降り注ぐ日。俺は日陰の道路を散歩していた。そして、道の真ん中にある、小さな石を見つけた。このままでは、タイヤに踏み潰されてしまう。俺は、その石を遠くのくさむらに置いた。

次の日、ユニカールの試合があつた。今は8-6で負けている。ついに俺の番が来た。力を込めて投げたストーンは、不自然な曲がり方をして、他の石に当たり、一気に3点を手に入れた。スーパージョットだ。他の人は、不自然な曲がり方をしたことに気づいていない。あまり納得いかない気持ちのまま家に帰り、気づいた。

「これは、石の恩返しだったのか。」
そして俺はあることを思いついた。

次の日もとても暑かった。うら庭にある、巨大な石を助けようと思った。もしかして、石も熱中症になるのではないかと思った俺は、黒いビニールシートをかけて石を「助けた」。

次の試合。12―0でボロボロ負けしている。そのくせ、まだ恩返しは来ていない。いつになったら来るのかと思ったその時、上から巨大な石が降ってきた。そのまま全てのストーンを潰した。

「もしかして、これは、石の恩返し？」

そして、石が喋った。

「いかがでしょう。この恩返しは。」

畑ピアノ

村山 愛以

丘の上にぽつんと古びたピアノがあった。鍵盤は日に焼けて白と黒のまだらな模様になっている。世間では「畑ピアノ」と呼ばれていた。果物畑を営む青年は幼い頃からこのピアノと畑で育った。畑を耕し、種をまき、そしてピアノを弾く。彼の奏でるピアノの音色に合わせて、畑に実る果物の種類が変わるのだ。

「今日はどんな音色にしようかな」彼は鍵盤に手を乗せる。最初に選んだのは、軽やかで弾むような音色。ト長調の明るい和音が響き渡ると、畑には瞬く間に赤く丸い実が姿を現した。「よし、サクランボだ」太陽の光を浴びてキラキラと輝くサクランボ。その甘酸っぱい香りが風に乗ってあたり一面に広がる。収穫したばかりのサクランボを口に運ぶと、顔が自然とほころんだ。

次の日、青年は少し物憂げな音色を奏でた。それは短調の、どこか哀愁を帯びたメロデー。指先から紡ぎ出される音は、まるで夜空に瞬く星のよう。すると、畑に実ったのは、深い紫色のブドウだった。「巨峰だ。今年は粒が大きいな」一粒一粒が、まるで宝石のように輝いている。青年は、ブドウを収穫しながら、この音色を奏でた時の気持ち

を思い出していた。少し寂しい、でもどこか温かい、そんな感情。その感情が、ブドウの深い甘さとなり、口の中に広がっていく。

ある晩、激しい雨が降り、青年の心はざわついていていた。天候が荒れると、ピアノの音色も不安定になりがちだ。青年は、どんな時もピアノに向かった。荒々しく、そして力強く鍵盤を叩く。それはまるで、雷鳴のような音。青年の心の叫びが、音となって畑に降り注ぐ。すると、畑の土から、ゴツゴツとした大きな実が顔を出した。それは黄色い縞模様のスイカだった。「なんだ、スイカか。てっきり何もできないと思ったよ」青年はスイカを抱え上げ、笑った。雨上がりの空気に満ちた畑で大きなスイカを割る。中からは真っ赤な果肉が顔を出した。青年は一口食べると、そのみずみずしい甘さに驚いた。畑ピアノは、ただ果物を生み出すだけじゃない。弾く人の心を映し出し、その心を果物という形にしてくれる。そして、その果物を食べた人の心も、豊かにしてくれるのだ。今日もまた、丘の上に立つ畑ピアノから、様々な音色が響き渡っている。それぞれの音色に込められた青年の思いが、色とりどりの果物となり、心を温かく満たしていく。

中休みに出てくる、ふしぎな生き物

廣瀬　　かな

ある日わたしは、友だち（大親友）と、お話をしていた。すると、大親友のことねちゃんが、

「ねえねえかなちゃん」そう言われて、「え？　なあに」とわたしは、聞きかえした。ことねちゃんがいきなり、

「あ……三年生になってしらないのは、おかしいのかもしれないけど、星ってどうゆう物なの？」

ことねちゃんが「どうゆう物なの？」と言ったしゅんかんに、ことねちゃんの顔がかあつと赤くなった。

「くすくすくす」わたしが、ことねちゃんの顔が、めっちゃくちや赤いのが、おもしろくてわらったら、

「もう！　かなちゃんわらわないでよ！」

「ごめん」わたしは、ひっしにわらいをこらえながら「いいよいいよおしえてあげる」と言った。

「星はね・・・」そう言おうとしたしゅんかんになんかおかしなきいろいぶつたいがおちてきた。(何？このへんな生き物みたいなやつ)たぶんことねちゃんも同じことを思っていたのかな？ことねちゃんも、目を大きくして、口をぽかんとあけて、何かを考えている様子だった。わたしたちが、そのぶつたいにびつくりして、頭がまつしろになっていたのは、一分くらいの間だったんだと思うけど、その時間が、わたしには、すごくながく感じた。するととつぜん、へんな星がわたしたちのめのまえにきた。するといきなり星がしゃべりだした。

「ぼくはほしのしほだよ。ほしだからさかさにしてしほ。なーんちゃって、たまたまたまたま。」

ことねちゃんは、びつくりしすぎてかちんこちんにかたまっていた。しばらくするとことねちゃんが、

「あーとあなたって何物？」と言うとしほが、

「ほしもの。だけどあなたじゃなくてぼくのことしほってよんでよね」わたしたちは、大ばくしようしてしまった。でもそのしゅんかんの中休みのチャイムがなった。するとしほが、

「もうかえらなきや」そう言った。そう言ったとき、ことねちゃんが、

「えっえ？ どうして？」と聞いた。すると、ほし・・・じゃなくて、しほが、

「だってぼく、中休みのスターだもん！」しほの言葉にことねちゃんはぼうぜんとしている。しばらくするとことねちゃんは、

「あー？ そう。バイバーイまたいつか！」とバイバイしたのは一か月前のこと。さいきんほしの話をして、しほは出てこなくなった。ある日、うちに手がみかとどいた。それは、しほから。手がみには、こんなことが書いてあった。

「きみへ

このまえはありがとう。ぼくは今、大人になって、りっぱにかがやいているよ

しほ」

わたしはこの手がみをよんで、夜空をみ上げた。するとしほが、わらったように見えた。

おいしいことばレストラン

仲井 美祐

家へ帰る途中、駅のうらの細い道の所に新しい店が建っていた。「おいしいことばレストラン」看板にはそう書かれていた。

メニューを開くと、「ありがとうサンドイッチ」「だいじょうぶカレー」「おめどうパフェ」など、どれも不思議なものばかり。私は興味本位で「ありがとうサンドイッチ」を注文した。少しすると、柔らかな雰囲気の店員さんがまるで魔法のような声で「おまたせしました」と私の前へ料理を運んできた。パンの焼けたいい香りと魔法の音が私を包み込んだ。食べた瞬間、胸に温かくて優しい気持ち広がっていったのが分かった。そして家に帰ってもその温かさは消えず、なぜか自然と家族や友達へ「ありがとう」と感謝のことばがあふれていた。

やっと気づいた。あの店のメニューのことばはただ食べるだけではなく、自分の胸の中で育ち、周りの人に届く、「ことばの栄養」になっていたのだ。

それからしばらく経ったある日のこと、私は母と喧嘩をした。家を飛び出した私の足はあの店の前へ向かっていた。店員さんに案内され席につきメニューを広げた。その時、

隣の席から「さようならケーキを1つ下さい」と、か細い男性の声があった。今にも泣きそうな顔で届いたケーキをゆつくりと味わっていた。そしてすべて食べ終え、席を立つと、男性は少しほえみながら涙を拭い「ありがとう」と店を後にした。きつと彼も心からの「さようなら」が言えたのだろう。

彼の背中を見送った私は再びメニューを眺めピッタリの料理を注文した。「おまたせしました、ごめんなさいスープです」目を閉じてそっとスープを飲み干し、あたたまった胸で家へまっすぐ帰ることにした。

宇宙人レモネード

井上 卓鴻

「ん？あの青いきれいな星はなんだ？」

「よし、次の惑星はここにするか。」

数々の惑星を侵略してきた宇宙人が次にえらんだ星が地球だったのです。

「金ピカの建物があるな。きっとあそこがこの惑星の中心にちがいない。」

ズズーン、ドスンッ。

地球におりたった宇宙人の一団は、京都の山奥から行動を始めました。

「よし、お前たち！この星の調査をし、我々のものとするのだ。」

「ん？何かいい匂いがするぞ。」

「あの子どもが持っている黄色い液体からだ。」

「よし、とびこめ！」

ジャポーン。

「美味しい、美味すぎる。」

「あっちにはオレンジの液体やシュワシュワしているやつもあるぞ。」
シュワワ、ドボーン、ゴクゴク。

「僕のレモネードがない！」

あっちこっちでお客がとまどっています。

それならお客の中の一人がうっかりコップに入っていた宇宙人を、ストローで飲んでしまいました。

「も、もちもちしていて美味しい・・・」

美味しいと気づいてしまった人々は、そのまま宇宙人をレモネードに閉じ込め “もちもちレモネード” という名物として飲まれて全めつしてしまいました。

「まさかこんなところで・・・無念・・・」

これは京都で一瞬はやった、不思議な飲み物の話。こうしてひそかに地球は守られたとき。

作文犬

白井 楽

僕は作文を書くのが大嫌いだ。どのくらい嫌いかというと、できてしまった口内炎を間違っかんてしまった時ぐらいだ。本当に嫌いだ。

今年も夏休みが来てしまった。それはつまり作文の宿題があるということだ。今年の作文の宿題は「ことばらんどショートショートコンクール2025」に決めた。最初は自力で頑張ろうとした。「ことばらんど」のホームページで書き方も見てみた。ダメだった。最終手段を使うしかない。「作文犬」だ。

僕はサンゴという犬を飼っている。サンゴは僕の相棒だ。ゲームをするときも横にいて、携帯を見ているときも横にいる。もちろん宿題をするときも。

そんなサンゴが作文犬なのだ。

初めてサンゴが作文犬だと気が付いたのは小学校6年生の夏休み。僕は同じように作文の宿題に取り組んでいた。この時も全く進まなかった。途中で作文を書くのが嫌になっっておやつを食べて、そのままサンゴと昼寝を始めた。しばらくして目が覚めるとサンゴが僕の手をなめていた。おやつの匂いがついていたのだろう。するとさっきまで全く

進まなかった作文がスラスラ書けるようになった。そこで、もしかしてと思い、何度か作文の宿題が出るたびに手をなめさせて確信した。サンゴが作文犬だと。

サンゴに1回手をなめられると700文字書ける。しかし、今日はサンゴがいびきをかいて昼寝をしていて、起きてくれない。おやつをあげてみたが、食べ終わったらすぐにまた寝てしまった。どうしよう。そうだ！僕は手にサンゴの大好物のヨーグルトをべっとり塗ってみた。するとサンゴがヨーグルトに気が付いた。ペロペロと手に付いたヨーグルトが無くなるまでなめてくれた。

「やった！」

僕は作文をスラスラ書き始めた。

1時間後、作文を終えて、ゲームで遊ぼうと思ったがなぜか作文を書くのをやめられない。

その時、僕は思い出してしまった。

「サンゴになめられすぎると作文を書き続けなければならなくなってしまふ」ということを。

受
賞
作
品
一
覽

市長賞

小学生の部

「森の芸術家」

小林 花穂 (町田市立忠生第三小学校 四年)

中学生・高校生の部

「飛んで火にいる」

小林 宗太 (町田市立町田第三中学校 三年)

教育長賞

小学生の部

「猫」

福嶋 暁太郎 (町田市立成瀬台小学校 六年)

中学生・高校生の部

「宇宙にあるルーレット」

高木 結菜 (町田市立町田第二中学校 一年)

東京町田・中ロータリークラブ会長賞

小学生の部

「石の恩返し」

石塚 灯真 (町田市立藤の台小学校 六年)

中学生・高校生の部

「畑ピアノ」

村山 愛以 (町田市立鶴川第二中学校 三年)

審査員賞

小学生の部

「中休みに出てくる、ふしぎな生き物」

廣瀬 かな (町田市立町田第一小学校 三年)

中学生・高校生の部

「おいしいことばレストラン」

仲井 美祐 (和光高等学校 三年)

ことばらんど賞

小学生の部

「宇宙人レモネード」

井上 卓鴻 (町田市立鶴間小学校 五年)

中学生・高校生の部

「作文犬」

臼井 楽 (町田市立鶴川第二中学校 二年)

審
查
員
講
評

「森の芸術家」（小林花穂）

なんて素敵なお話でしょう。本来は食べられてしまう側のちようを逃がしてあげるといふ展開に心が温まると同時に、芸術家魂に火がついたときのクモの気持ちもありありと伝わってきました。ちようが自分だけでなく、仲間もつれてきてくれるのもいいですね。しずく、花びら、スタンドグラス……美しいクモの作品が目に見えるようでした。

—— 田丸 雅智

「飛んで火にいる」（小林宗太）

出だしから情景がぱつと浮かび、ウキウキしながら読み始めました。時間の流れを季節と重ねて表現しているところも素敵で、物語の終わりには夏の景色や、それを眺める気持ちまで伝わってきて、とても印象に残りました。

—— KENTHE 390

「猫」(福嶋暁太郎)

タイトルからは想像できない楽しい展開で、能力に目覚める仕組みがとてもユニークでした。いきいきとした会話で物語が進み、後半のリスたちの可愛らしい口調が印象的で、まるでアニメを見ているような気持ちになりました。

—— KENTHE 390

「宇宙にあるルーレット」(高木結菜)

「人は、目の前の大切なものに気づかずにこわしてしまおう」というラストのメッセージが、ルーレットのことに限らず様々なことに掛けられているように思われ、深みを感じました。ルーレットで悪いことを引いてしまったらSNSでせめられて病むという描写も、現代的でうならされます。ルーレットが宇宙に自然生成されるという設定も、じつに魅力的でした。

—— 田丸 雅智

「石の恩返し」(石塚灯真)

ユニカールをテーマにしたショートショート小説は初めて読みました！ユニカールの試合中、ストーンの動きの描写がとてもいきいきとしています。石が熱中症になるかもしれない、という発想もかなりユニーク。石自身のひょうひょうとした言葉で終わるところにセンスを感じました。

—— 藤岡 みなみ

「畑ピアノ」(村山愛以)

全体を通して、まるでレンズ越しにのぞいているような、統一されたトーンで素敵な世界観が広がっていました。読みながらその場にいるような気持ちになり、風や匂い、ピアノの音色まで感じられる書きぶりが印象的でした。

—— KENTHE 390

「中休みに出てくる、ふしぎな生き物」（廣瀬かな）

出てくるキャラクターが全員とおしいです。単にストーリーが進んでいくだけでなく、台詞や表情などかわいい世界観が一貫していて、楽しんで書いているのがよく伝わってきました。中休みに星が現れるという発想は、大人にはなかなか出てこないものだと思います。

—— 藤岡 みなみ

「おいしいことばレストラン」（仲井美祐）

読んでいてこちらも胸がじんわりあたたかくなるお話でした。特に、他のお客様さんの行動を「私」がさりげなく見ていて、無意識に影響を受けながら心が動く瞬間が描かれているのが素敵です。最後はごめんなさいスープを飲んだ後、お母さんに言葉を届ける前に終わっているところがよかったです。

—— 藤岡 みなみ

「宇宙人レモネード」(井上卓鴻)

昔話「3枚のお札」の鬼婆をはじめ、妖怪や宇宙人などの人ではない存在が人に食べられてしまうというお話は昔から多くありますが、今作は題材のレモネードや、「もちもち」という食感などに現代的なものを感じました。ちりばめられた擬音語も、物語全体を加速させていて、いいですね。「京都」という言葉より先に「金ピカの建物」という言葉を出された点にもセンスを感じました。

—— 田丸 雅智

「作文犬」(臼井樂)

冒頭から「口内炎を間違って噛んでしまった時ぐらい嫌い」という表現が光ります。ことばらんどショートショートコンクール自体を作品に登場させるメタ構造も面白かったです。テンポ・リズムがよく、無駄のない完成度。小さなことに見えて、犬の名前が「サンゴ」なのがかなりいい味を出しています。

—— 藤岡 みなみ

プ 審
ロ
フ 査
ィ
ー
ル 員

審査員長 田丸雅智

ショートショート作家。二〇一一年に作家デビュー。代表作「海酒」は短編映画化されカンヌ国際映画祭などで上映された。現代ショートショートの旗手として、執筆に加え全国各地で創作講座を開催するなど幅広く活動。

審査員

K E N T H E 3 9 0

rapper。町田市出身。フリースタイルバトルで実績を重ね二〇〇六年にデビュー。二〇一二年から音楽レーベル「DRAM BOY」を主宰。国内外でのライブのほか、TVやラジオへの出演、楽曲提供、音楽監修など幅広く活動。

審査員

藤岡みなみ

エッセイスト・ラジオパーソナリティ・ドキュメンタリー映画プロデューサー。時間SFと縄文時代が好きで、読書や遺跡巡りって現実にある時間旅行では？と思ひ、二〇一九年からタイムトラベル専門店を始める。

実

施

概

要

「ことばらんどシヨートシヨートコンクール2025」実施概要

主 催 町田市民文学館ことばらんど・町田市立図書館

協 力 東京町田・中ロータリークラブ

応募資格 町田市在住・在学の小・中・高校生

募集期間 二〇二五年七月一日～九月二〇日

募集作品規格 ショートシヨート作品

四〇〇字詰め原稿用紙一～五枚

賞 市長賞

教育長賞

東京町田・中ロータリークラブ会長賞

審査員賞

ことばらんど賞

審査員

審査員長 田丸雅智

審査員 K E N T H E 3 9 0

審査員 藤岡みなみ

応募件数

八四七編

小学生 二九三編

中学生 五一六編

高校生 三八編

ことばらんどシヨートシヨートコンクール2025受賞作品集

発行日 二〇二六年三月二十五日

編集・発行 町田市民文学館 ことばらんど

〒一九四―〇〇一三

東京都町田市原町田四―一六―一七

電話 〇四二―七三九―三四二〇

刊行物番号 二五―八三